

令和 4 年 5 月 26 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18H03104

研究課題名 (和文) 慢性疾患高齢者の終末期の充実に向けた市民・医療をつなぐ対話支援プログラムの検証

研究課題名 (英文) Effectiveness verification of an end-of-life discussion program for enriching the end-of-life of elderly people with chronic illness in Japan.

研究代表者

増島 麻里子 (Masujima, Mariko)

千葉大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：40323414

交付決定額 (研究期間全体) : (直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要 (和文) : 人生の最終段階を生きる当事者との“終末期を意識した対話”(End-of-Life Discussion: 以下EOLD)は、対話の推進が最終目的ではなく、肯定的な側面に加えて、このプロセスで生じ得る当事者や家族の落胆、葛藤をいかに支援するかが重要となる。本研究課題では、慢性疾患とともに生き、かつ人生を積み重ねた豊かな経験を有する高齢者を対象とした①ICT版EOLD対話支援アプリケーションの開発、②患者と家族間のEOLDを促進する家族看護プログラムの考案、③EOLD看護プログラムの促進/阻害要因について、調査結果を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

“終末期を意識した対話”(EOLD)の時期や内容を見極める卓越した対話の在り方の検討に向けて、日本ではどのような患者や家族への対話が有用か、中立的かつ研究的な立場から原点に立ち戻り、丁寧に解明する必要がある。“死”や“終末期”だけに捉われず、人生の振り返りによる価値観を共に見出す看護の視点を含め、現在、普及しているスマートフォンやパソコンで使える対話支援アプリケーションを開発した成果先駆的であり、ツール開発と同時に運用面での看護プログラムを当事者と様々な学問領域の研究者で共に開発・改良した点は特徴的である。

研究成果の概要 (英文) : Those conducting end-of-life discussion (EOLD) with parties living at the end of life need to be aware of the discouragement and conflicts experienced by the parties and their families during the process, rather than making dialogue the ultimate goal while providing support. The research project identified the following research findings: 1) the development of an ICT version of an EOLD dialogue support application to be used by nurses working primarily with chronically ill older people; 2) the development of a family nursing program to facilitate EOLD for patients and their families; 3) facilitating and inhibiting factors in the nursing program.

研究分野：臨床看護学

キーワード：アドバンスケアプランニング 終末期対話 看護プログラム 慢性疾患 高齢者 ICT アプリケーション

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本における終末期に関わる対話の現状

人生の最終段階を生きる当事者と家族や医療者との間で行う“終末期を意識した対話”（End-of-Life Discussion: 以下、EOLD）は、英語圏では対話プログラムの開発が進み、有用性が検証されてきた。EOLD の効果には、患者や家族の QOL 向上、過度な医療の回避等が示唆される。しかし、我が国では個々の実践者が日本文化になじむ EOLD の対話内容や時期、方法を模索して行う現状にあり、その効果や必要性も含めた学術的検証には至っていない。

日本における 65 歳以上の高齢者の人口割合は、2065 年には 38.4% と推計される¹⁾。必然的に、多くの高齢者が人生の最終段階を生き、死亡者数が増加する多死社会となるが、終末期をどのように生きたいかという真の意向は本人にしかわからない。当事者意向を尊重するには、本人自身が終末期や死について考えるとともに、家族や医療者と終末期に関わる対話（EOLD）を重ね、当事者意向を共有することが不可欠となる。

(2) 研究の意義

国内外の EOLD プログラムの展開と検証に関わる研究の動向として、効果的な EOLD のためには、①EOLD の熟練した対話スキルを有する人材育成、②EOLD に対する当事者のレディネス、③診断時や再発時の EOLD に関する医療情報提供の在り方が重要となる²⁾。欧米では様々な EOLD プログラムが開発され、効果が検証されてきた。代表的なプログラムには、当事者のレディネス向上と EOLD の人材育成に向けた米国発のプログラム Respecting Choices^{®3)} や、EOLD の必要事項を列挙したツールを用いるプログラム⁴⁾ 等がある。日本でも、病院を基軸とした人材育成が加速し始めたが、EOLD を推し進めることが前提条件ではなく、効果といった肯定的な側面に加え、EOLD のプロセスで生じ得る当事者や家族の落胆や葛藤をいかに支援していくかが重要である。EOLD の対話時期や内容を見極める卓越した対話の在り方の検討に向けて、日本ではどのような患者や家族への EOLD が有用なのかを、中立的かつ研究的な立場から原点に立ち戻り、慎重かつ丁寧に解明する必要があると考えた。特に、慢性疾患高齢者は、病状や心理状態の見極めが重要となる。さらに、高齢者は、これまで人生を積み重ねてきた豊かな経験があり現在に至るので、“死”や“終末期”だけに捉われず、人生のリフレクションに基づき価値観を共に見出していく看護の視点が欠かせない。日本の慢性疾患高齢者の EOLD プロセスの実態や効果は十分明示されていないことから、EOLD における必要/不要な対話や適切な時期、効果/非効果的な EOLD 対話支援に関わる看護プログラムを明示することが不可欠と考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の慢性疾患高齢者に対する EOLD について、①当事者視点から開発した EOLD 対話支援ツールによる看護プログラム介入の効果、②当事者自身の考えを家族や医療者と共有する看護プログラム展開の促進/阻害要因を明示することとした。

この研究目的を達成するために、2018 年度～2020 年度の 3 年間における研究計画を設定したが、2019 年度後半の COVID-19 パンデミックの影響により、本研究の対象となる慢性疾患高齢者への直接的な研究依頼や研究遂行が難しい状況となった。そこで、2021 年度までの 4 年間へと研究期間を延長、および、適切な研究目的と調査方法を再検討・修正し、研究を遂行した。

3. 研究の方法

(1) 第一段階（2018 年度）：患者と家族間の EOLD を促進する家族看護プログラムの考案

プログラム作成は、研究者全 7 名、および、慢性疾患患者看護に精通するがん看護専門看護師や糖尿病看護認定看護師らの研究協力者全 7 名で行った。まず、先行研究で開発した ICT 版 EOLD 対話支援ツール Ver. 1 を、高齢者がより使いやすく、持続使用できるようなインターフェイスと機能の刷新を図り、ツール Ver. 2 「My Wish ノート」を作成した。並行して、本ツールを用いる看護プログラムを検討した。

EOLD は人生の終焉に至るまで断続的に行うが、本プログラムの提供時期は、疾患診断時や初期治療を終えた経過観察中等、心身状態が比較的安定している EOLD 導入期とのコンセンサスを得た。また、対話目的や目標を段階的に配置した EOLD ループリック Ver. 1 を作成した。さらに、本看護プログラムの介入時期と具体的な関わり方を構築するための先行研究の位置付けで、慢性疾患の中でも進行がんを焦点化し、40 歳代から 80 歳代の家族 10 名を対象に、患者と家族間での EOLD を促進するための家族看護プログラムを考案し、研究者らが実施した。

(2) 第二段階（2019 年度）：EOLD 対話支援ツールの精練

本段階の研究目標は、①最終段階を生きる慢性疾患高齢者当事者と家族や医療者間で行う“終末期を意識した対話 EOLD”支援ツール精練の最終構築、②本対話支援ツールを活用しながら、対象者と関わる際に必要な看護プログラムの予備調査「EOLD 対話支援プログラムのプレテスト」に取り組むことであった。

看護プログラムの予備調査については、一般市民を対象とする講座において当該ツール Ver. 3

を紹介し、集団に対する「EOLD 対話支援プログラム」の試行を行った。集団に対するプログラムにおいては、昨年度に検討した EOLD ルーブリック Ver. 1 に基づき、対話レベル 3 段階および EOLD に対するレディネスやコミュニケーションタイプ・健康レベルに着目し、EOLD について知ること、EOLD について自分で考えてみる、他者との対話を促すことの 3 要素を取り入れ、30 分～90 分の時間および対象者層に応じて、妥当と考えられる部分を活用した。

(3) 第三段階 (2020～2021 年度) : EOLD 看護プログラム展開の促進/阻害要因

本段階の研究目標は、最終構築した“終末期を意識した対話 EOLD” 支援ツール Ver. 3 を活用し、対象者と関わる際に必要な看護プログラムの展開に取り組むことであった。フィールドにおいて、ツール活用と対面でのインタビュー調査を定期的に設ける縦断的調査の実施を予定していたが、COVID-19 パンデミックの影響のため病院で対象者をリクルートすることが困難な状況となった。そこで、がん疾患を含む慢性疾患看護のエキスパートに ICT 版 EOLD 対話支援ツール Ver. 3 の内容の精査を依頼し、質的記述的分析を行い、治療初期段階における慢性疾患高齢者当事者と家族への内容妥当性を考察した。また、本考察に併行して、EOLD 対話支援プログラムの時期や内容に関する精練をより図ることを目的に、2008 年「終末期医療の決定プログラムに関するガイドライン」策定以降の日本の成人におけるエンドオブライフケアに関する研究論文を対象にマッピングレビューを行った。

4. 研究成果

(1) 当事者視点から開発した EOLD 対話支援ツールによる看護プログラム介入効果

【成果概要】全研究期間を通じ、EOLD 支援ツール精練については、年度前半に本研究課題で活用する最終版としての ICT 版 EOLD 対話支援ツール Ver. 3 「My Wish ノート」を完成させた。

看護プログラム介入の効果については、COVID-19 パンデミックの影響により、慢性疾患高齢者への直接的な研究依頼や研究遂行が困難であったことから、本研究では慢性疾患高齢者の中でもまず予備調査として行った進行がん患者を対象に、支援ツール最終版の要素を生かした患者と家族間での EOLD を促進する家族看護プログラムを提示した。

① ICT 版 EOLD 対話支援ツール Ver. 3 「My Wish ノート」の開発

最終成果物として、40 歳代から 80 歳代 10 名、および、学際研究者の検討を経て、親しみやすさの改訂、終末期医療に関する価値観の記録、仮想事例に基づく ACP シミュレーション等を含むツールを開発した (図 1)。

特に、コンテンツ改訂時に留意した点は、EOLD が必要な理由の加筆と伝わりやすさの工夫、コンテンツの順番であった。完遂率が高いコンテンツは、終末期医療・処置の意向 (EOL care preferences)、病名や予後告知等の意向 (Wishes about truth telling)、仮想事例に対する自分自身の意思決定 (Thoughts about EOL vignettes) 等の順であった。完遂率には、回答のしやすさや簡便さ、内容の想定のしやすさが影響すると考えられた。

研究成果は、The 7th international advance care planning conference (ACP-i) で発表した。本演題は、Poster Award 候補 75 演題中 22 演題に選ばれ、5 分間の口頭発表を行った。

② 進行がん患者と家族間の EOLD を促進する家族看護プログラム考案

進行がん患者の家族 10 名を対象にした「Changes in End-of-life Discussion between Patients with Advanced Cancer and their Family Members after Implementation of the Nursing Program」の成果を The 7th international advance care planning conference で発表した (表 1)。

本演題も、Poster Award 候補 75 演題中 22 演題に選ばれ、5 分間の口頭発表を行った。さらに、文献レビュー結果と社会的認知理論を基盤に、看護プログラムの枠組みを構成し、プログラムで用いる教育的ツールとして「進行がん患者と家族の間での終末期の話し合いを促進するための家族向けのガイドブック」を作成し、看護プログラムを考案した⁵⁾。

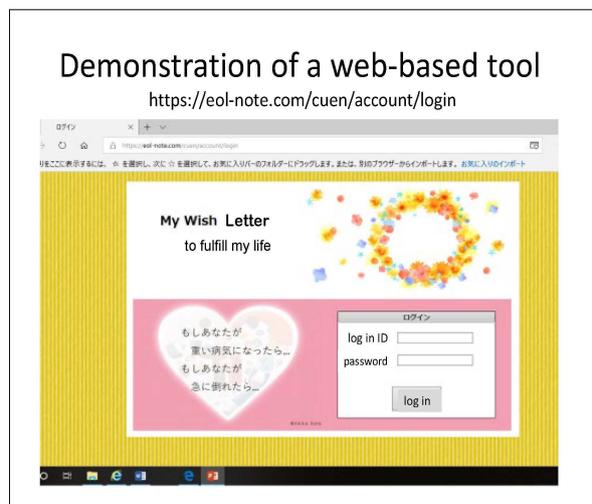


図 1. EOLD 支援ツール「My Wish ノート」

表 1. 患者と家族の EOLD 後の変化 (一部抜粋)

They realized the necessity of discussing the end of life	They realized there was a possibility that the patient would be unable to indicate their intent in the future
They were able to accept the reality of death recognizing the clinical state of the patient	They prepared plans to spend the remaining time meaningfully considering the patient's desires

(2) 当事者自身の考えを家族や医療者と共有する EOLD 看護プログラムの促進/阻害要因

【成果概要】全研究期間において、EOLD 看護プログラムにおける促進/阻害要因を明示するためには、プログラム展開が前提であった。前述のとおり、慢性疾患高齢者を対象とした実施展開が困難であったことから、予備調査として行った進行がん患者と家族への看護プログラムの適用、および、研究期間中に行うことが可能であった体系的なマッピングレビューにより、EOLD 看護プログラムの促進/阻害要因を導いた。

① 進行がん患者と家族間の EOLD 看護プログラムにおける阻害要因

研究者が先行研究にて作成した「進行がん患者と家族の間での終末期の話し合いを促進するための家族への看護プログラム」実施後の患者と家族の終末期の話し合いの変化、プログラムを運用するうえでの問題点を明らかにする目的で調査を行った。研究者自身が看護プログラムを実施し、インタビューの逐語録をデータとして質的帰納的分析を行った。対象は 10 名であり、年齢は 40 歳代から 80 歳代、患者との続柄は妻、夫、娘、父親であった。終末期の話し合いの変化は「これまで気がかりだった話題を話し合うことができた」「話し合った内容を書き留めた」など、プログラム運用上の問題点は「実践方法が個々のニーズに合わない場合がある」などが明らかになった。また、話し合いの阻害要因として、「家族は死を意識した患者との会話は、家族に悪影響を及ぼすと信じている」「患者と家族は終末期の話し合いの重要性を認識していない」「家族は患者の死が近づいていることを認めたくない気持ちが強い」などを明示した⁵⁾。

② 日本におけるエンドオブライフケアの研究動向から考える EOLD 促進/阻害要因

日本においては、2008 年に「終末期医療の決定プログラムに関するガイドライン」が策定された。ガイドライン策定以降のエンドオブライフケアに関する研究のマッピングレビューにより研究動向を類型化し、日本の研究者に向けて研究の傾向と今後の研究課題を明示した。対象文献は、医中誌 WEB にて検索可能なエンドオブライフケアに着目した 2008 年 1 月～2019 年 7 月出版の論文の内、本文に抄録がある原著論文または文献レビューであり、研究対象が日本の成人、エンドオブライフ期にある、エンドオブライフの原因となる疾患がある等とした。検索の結果、合計 508 件が抽出され、2008 年 28 件、2018 年 60 件と、年毎の文献数は漸増していた (図 2)。

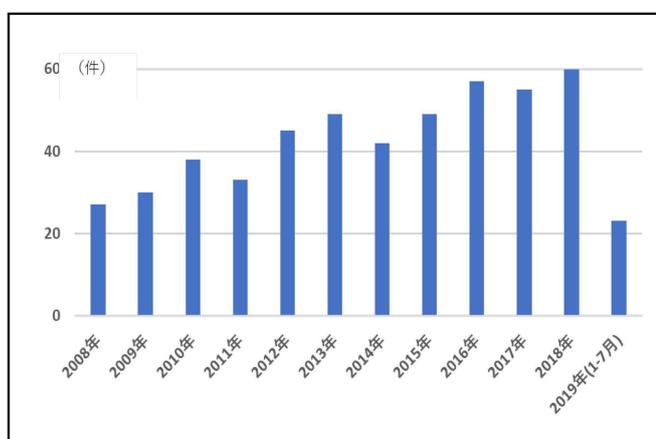


図 2. エンドオブライフケア研究論文数の推移

さらに、全論文について研究の焦点を分析するために、論文著者が設定したキーワードのうち、研究者らが文献を精読して研究内容を最もよく表すワードを各論文 1 つ抽出し、分類した結果、アドバンスケアプランニングを含む EOLD に関する論文は 33 件であった (表 2)。該当文献を精読し、EOLD 促進/阻害要因を分析した結果、促進要因として「病状の理解」「心情を捉えたコミュニケーション」「医療チームの編成」等、阻害要因として「全人的苦痛の増大」「対話のタイミングの難しさ」等が明示された。本研究成果の一部は、「日本におけるエンドオブライフケアに関する研究の動向」⁶⁾として、日本緩和医療学会学術集會に学会発表を行った。

表 2. 日本のエンドオブライフケア研究動向における研究の焦点
*全 22 項目中上位 5 項目を抜粋

研究の焦点	(件)
身体的苦痛・症状マネジメント	40
意思決定 (アドバンスケアプランニングを含む)	33
在宅ケア	32
疾患特性 (統合失調症、がんなど)	31
家族ケア	19

(3) 研究成果の総括

本研究課題の遂行によって、ICT 版 EOLD 対話支援ツール Ver. 3 「My Wish ノート」を開発し、EOLD 看護プログラムの核となる促進/阻害要因の一部を明示した。今後の研究発展のためには、考案した EOLD ルーブリック Ver. 1 を盛り込み、アクセス可能な高齢者の対象にフォーカスし、実行可能性と検証を繰り返す、日本の文化や社会情勢に合わせたツールコンテンツの改良と活用される EOLD 看護プログラムを継続的に精練する。

<引用文献>

- 1)内閣府:高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況. 令和3年版高齢社会白書, 2021.
- 2)Judith R, et al:Definition and recommendations for advance care planning: an international consensus supported by the European Association for Palliative Care. The Lancet Oncology, 18(9), e543-e551, 2017.
- 3)Respecting Choices® person-centered care; <https://respectingchoices.org/> (2022. 5. 25 アクセス)
- 4)Rodenbach RA, et al: Promoting End-of-Life Discussions in Advanced Cancer: Effects of Patient Coaching and Question Prompt Lists. Journal of Clinical Oncology. 2017;35(8):842-51.
- 5)渡邊美和, 増島麻里子: 進行がん患者と家族の間での終末期の話し合いを促進するための家族への看護プログラムの開発, 千葉看護学会会誌, 26 (1), 39-48, 2020.
- 6)田代理沙, 佐藤 睦, 増島 麻里子: 日本におけるエンドオブライフケアに関する研究の動向 日本語文献のマッピングレビュー, Palliative Care Research, 15 巻 Suppl. 1242, 2020.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 渡邊 美和、増島 麻里子	4. 巻 26
2. 論文標題 進行がん患者と家族の間での終末期の話し合いを促進するための家族への看護プログラムの開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 千葉看護学会会誌 = Journal of Chiba Academy of Nursing Science	6. 最初と最後の頁 39～48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20776/S13448846-26-1-P39	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件／うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Mariko Masujima
2. 発表標題 Interdisciplinary palliative care research: The Development of a web based End-of-Life care education tool for the elderly
3. 学会等名 All Ireland Seminar on Designing and Developing Technologies for Palliative Care（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Zaiya Takahashi, Mariko Masujima, Naho Sato, Miyuki Ishibashi
2. 発表標題 Challenges of Community Based Advance Care Planning in Japan
3. 学会等名 International Psycho-Oncology Society（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mariko Masujima, Miwa Watanabe, Miyuki Ishibashi, Naho Sato, Takeshi Umezawa
2. 発表標題 Assessing the usability of a web-based advance care planning education tool for adults: a pilot study
3. 学会等名 The 7th advance care planning international(ACP-i) conference（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miwa Watanabe, Mariko Masujima
2. 発表標題 Changes in End-of-life Discussion between Patients with Advanced Cancer and their Family Members after Implementation of the Nursing Program
3. 学会等名 The 7th advance care planning international (ACP-i) conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田代理沙 佐藤睦 増島麻里子
2. 発表標題 日本におけるエンドオブライフケアに関する研究の動向 日本語文献のマッピングレビュー
3. 学会等名 第25回日本緩和医療学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 石橋みゆき, 増島麻里子 (監修・執筆)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学研メディカル秀潤社	5. 総ページ数 25
3. 書名 Nursing Canvas 7(9) : 患者さんと家族の“生きる”を支援するエンドオブライフケア	

1. 著者名 増島麻里子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 4
3. 書名 訪問看護と介護24(8) : がん終末期にある在宅療養者へのケア 患者・家族と、何をどう話すか	

1. 著者名 増島麻里子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本看護協会出版会	5. 総ページ数 6
3. 書名 看護実践にいかすエンド・オブ・ライフケア第2版：日本および世界におけるエンド・オブ・ライフケア研究の動向	

〔産業財産権〕

〔その他〕

千葉大学大学院看護学研究科 エンドオブライフケア 推進・発展に向けた教育研究プロジェクト https://www.n.chiba-u.jp/adult-gerontological/eolc/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石橋 みゆき (Ishibashi Miyuki) (40375853)	千葉大学・大学院看護学研究科・准教授 (12501)	
研究分担者	佐藤 奈保 (Sato Naho) (10291577)	千葉大学・大学院看護学研究科・准教授 (12501)	
研究分担者	梅澤 猛 (Umezawa Takeshi) (50450698)	千葉大学・大学院工学研究院・助教 (12501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	川瀬 貴之 (Kawase Takayuki) (90612193)	千葉大学・大学院社会科学研究院・准教授 (12501)	
研究 分担者	石川 崇広 (Ishikawa Takahiro) (00749426)	千葉大学・大学院医学研究院・特任助教 (12501)	
研究 分担者	渡邊 美和 (Watanabe Miwa) (90554600)	東都大学・幕張ヒューマンケア学部・講師 (32428)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	田代 理沙 (Tashiro Risa)	千葉大学・大学院看護学研究科・博士後期課程 (12501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関